

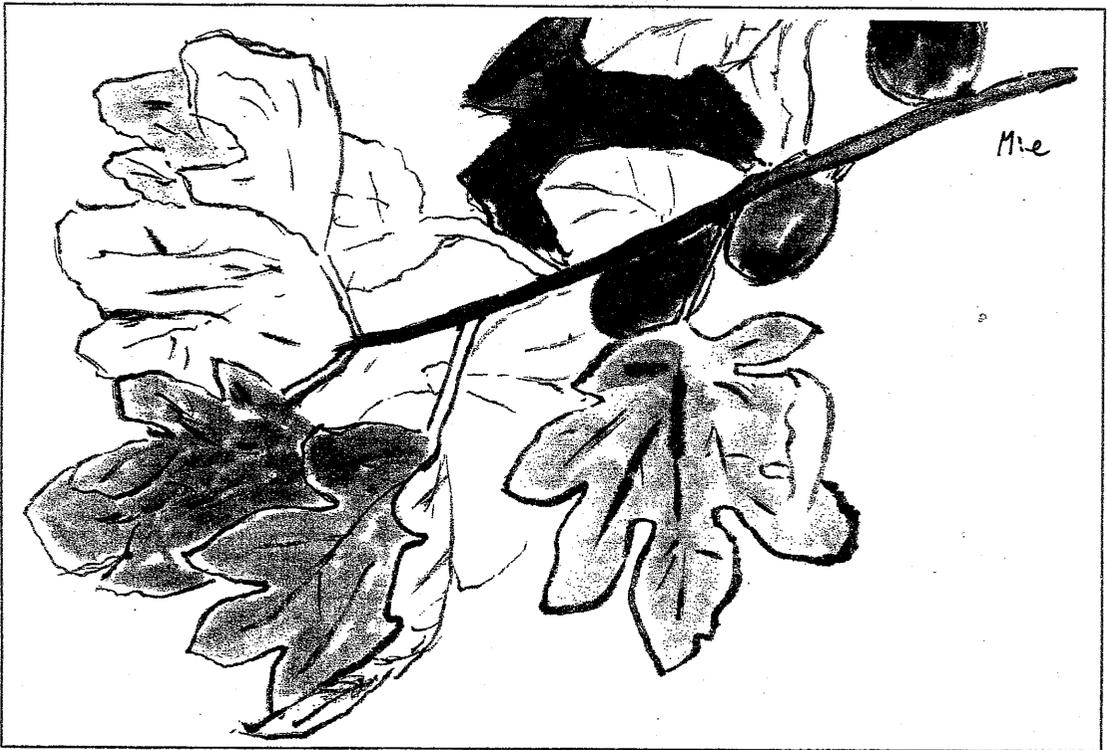
オリーブの樹

第77号

2008年2月29日

شجرة الزيتون

早期釈放！重刑策動をはね返し、重信さんを支えていこう！

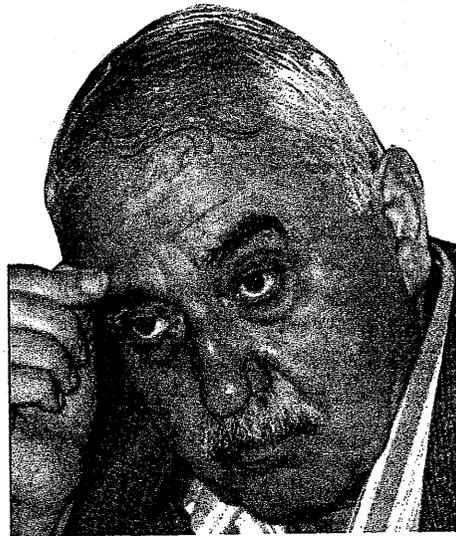


目次

- P 2 元PFLP議長ジョージ・ハバシュ同志追悼 元日本赤軍有志
P 3 一月二月の歌 重信房子
P 4 独居より67 ジョージ・ハバシュ同志死去の報から 重信房子
P11 読者からの声
P12 ライラ・ハリッド、カルロスからのメッセージ
P13 日本赤軍の歩み16 重信房子
P19 シゲに捧げる「私小説」その67 山田美枝子

重信房子さんを支える会

元PFLP議長ジョージ・ハバシュ同志追悼



PFLPの全同志と家族の皆さん

何よりも、ハバシュ同志の死に対して心からお悔やみ申し上げます。

彼は、パレスチナ革命はもとより世界革命の父であり、解放戦士はどうあるべきかという我々の自己変革の教師でした。

そして、何よりも、彼は、革命活動の中の困難を必ず共に担う同志であり、世界中の各国革命による国際戦線を発展させるための同志でした。

だから、彼を失った今、悲しみに直面するだけでなく我々の戦線中の大きな空白を感じざるを得ません。

PFLPの全同志と家族の皆さん

ハバシュ同志も分析していたように、帝国主義者によるグローバリズムのために、21世紀初頭の世界の状況は20世紀に想像したよりもっと困難なものとなっているので、人々の困難な状況をできるだけ早く解決するために、私たちの任務展開はもっともっと力強いものになる必要が問われています。

そう。ハバシュ同志の魂の前で、帝国主義者のグローバリズム政策に対抗する闘争の連帯を強化していくことを誓います。

さらに、彼の魂の前で、我々は解放の戦士たちの連帯する隊伍を強化する決意を表明します。

パレスチナ解放の前進万歳！

ハバシュ同志を筆頭にしたPFLPの歴史的な闘争万歳！

パレスチナ人と日本人の連帯戦線万歳！

2008年1月30日
元日本赤軍有志

一月二月の歌

重信 房子

引き返す勇気を卑怯と言いつつ時代君卑怯であれよあの雪の日

振袖を着ることもなく過ぎ行きし二十歳の冬の誇りを思う

振り返る二十歳の時代の友情が手紙の中から立ち上がり来る

再会の戸惑い隠して振り返る光に満ちた我らの時代

透明な粒子が光る立春の残雪の獄庭にカラス降り立つ

ストックのピンクの花の枯れはじめ面会の君なぜ来ないのか

別れがたく立ち話する垣根には白き花房アセビが咲いてた

吾子に会う尽きない想いを十分に込めえず戻る独房寒し

地中海の冬でも青き海に来て君を弔うつま先寒い日



独居よい67 2月10日~2月14日

ジョージ・ハバシュ同志死去の報から

重信 房子

2月1日 咲きそろう日本水仙匂いたつ

新しいこと始めてみようか

今日、上告審のための弁護士選任届けに署名指印をして、送り返しました。

あつという間の時間の流れです。去年の12月20日に、控訴棄却。そしてあわただしい年末と新年早々の上告を経て、弁護士と選任届の話をして手続きを確認したら、もう2月に入ってしまいました。

第一審以来ずっと大谷弁護士ら4名の弁護団によってこれまで公判を闘ってきました。今年からの上告審もまた、同じ弁護団で行うことを確認しました。そして、第二審前に手術の必要について、言われていた「卵巣嚢腫」については、上告趣意書作成後に再検査の上で手術を決めることを弁護士と確認しました。去年よりも大きくなっていなければ、手術をせずに、そのままにしておきたいところです。「耳下腺腫瘍」の方は、去年の8月には、しこりが消滅したので、完治とみなしています。

昨年「控訴棄却」は予測していたとは言え、残念な思いで新年を迎えました。現在の公判の速度から言うと、上告の判決も秋頃には決着がつくだろうと言われていました。去年の12月26日、接見禁止の全面解除がやっとなされました。今の日本の政治に寄り添った司法の現実では、上告審は、第二審同様、よい展望や「奇跡」は考えにくいです。上告が棄却され、刑が確定すると、こうして自由に文章を何枚も書いて投函するということではできなくなります。面会も、毎日1人に会える今と違って、1カ月に2回ということらしいです。これから夏までの間に、今後の“確定”処遇を見越した準備をあれこれと考えざるを得ません。限られた今の条件の中で、少なくとも面会や文通で交流できる出合いを大切に生きていきたいと思えます。これまでもみんなに支えられてきました。これからもどうぞよろしくお願いします。

ちょうど1月29日に受け取った新聞で、PFLPのハバシュ元議長が、26日にヨルダンのアンマンで病死したことを知りました。PFLPでは、創立40周年の去年から、英文のホームページを立ち上げて、パレスチナの現状を広く世界へと発信しています。(米

欧に住むパレスチナ人の多く居たPFLPにしては遅い英文サイトの登場です。)ムスタファ・バルグーティの「パレスチナ・イニシアチブ」や、ヒズボラ系のサイトは、すでにずっと前から英文で見ることができました。1月に入って、友人から届いたPFLPの英文サイトのコピーに、ライラ・ハリッドのアンマンからのコメント記事「ハバシュの容態は今は安定している」というのがありました。それで、ああ、もうターミナルケースなのだな……と、思いながら読みました。

その分1月29日の新聞記事を読んだ時も、静かに理解しました。そして、友人を通して弔文をPFLP宛てに送ってくれるように頼みました。(2頁参照)

ハバシュ議長と出会ってからもう37年になります。革命の同志であり、また先達としてたくさんのことを学びました。当時、まだ40歳を過ぎた頃のあの70年代、議長はセーターにGパンのラフな格好で、PFLPの情報センター、アル・ハダブにもよく立ち寄りしました。また、ベイルートのパレスチナ難民シャティーラ・キャンプや、サイダのアイネヘルワ・キャンプ、それに去年レバノン軍に包囲制圧された北部の町トリポリのナハル・アル・バルド・キャンプのPFLP事務所によく顔を出していました。

当時からイスラエルのターゲットだったので、ハバシュの護衛、安全対策は厳しくとられていましたが、ひよひよいと公然事務所のアル・ハダブにも来て、「アラビック・コーヒーを飲もう!」と、私たち外人スタッフを誘っては、様子を尋ねたり気配りしていました。あの頃、70年代のヨルダン内戦総括をめぐって、72年には、党内から分派を生み出しました。(後に、その分派は空中分解してしまいました。)当初は、PFLPのレバノン南部駐留のコマンドが不満分子で、指導部批判から党内矛盾が激化していました。その間も、下部から尊敬されていたハバシュとアブ・アリ・ムスタファは、分裂回避に走り回っていました。

その頃ちょうど日本からきた友人を招いて、ギターと歌の交流会が、ガッサン・カナファーニの家でありました。私たちがガッサンの家に来ているのを知って、アル・ハダブの仲間たちとワイワイやっているところに、「近くまで来たから驚ろかそう」と突然にハバシュが立ち寄りしました。みんな歓声をあげて喜んでいま

た。でも、ハバシュが立ち上がり、挨拶を交わしてドアを閉めたとたん、ガッサンが「バンザイ」とジャンプして、「先生の去った教室の小学生だね!」と笑わせました。

また、72年春、ちょうどガッサンの小説「太陽の男たち」が映画化され、監督も来て試写することになりました。小さなスタジオを借りて、ごく内輪の少数の集まりでしたが、ガッサンに呼ばれて行くと、ハバシュが夫人を伴って見に来ました。ああ、ハバシュのために会場を小さなホールにしたのだなと理解しました。上映後、ハバシュは「エクセレント!」を連発して、ガッサンと監督を喜ばせていました。結末を小説どおりにしなかったことなど、みんなで話している時のハバシュは、やっぱり教師のようでした。

73年には日航機ハイジャック「ドバイ事件」の後、8月初めに私はバグダッドからベイルートに来て、その対策に追われていました。その直後の8月10日頃のことです。ベイルートからバグダッド行きの飛行機がイスラエル戦闘機に挟まれて、テルアビブ空港に強制着陸させられました。ハバシュの乗る予定だった飛行機です。イスラエルのラジオ放送は成功したと思ったのか、「ハバシュ議長の乗った飛行機をインターセプトで強制着陸させた」と放送しました。一時は仰天したパレスチナ人がアル・ハダブを何重にも取り囲んで殺到し、事実を知りたがりやりました。でも、ハバシュは直前に予定を変えたために命拾いました。以来、PFLPのセキュリティはますます厳格になりました。

ハバシュ議長は50歳代で心臓発作に倒れてから、体に麻痺が残り、その後、80年代以降は、アブ・アリ・ムスタファがPFLPの指揮をとってきました。それでも、ハバシュ議長は、85年岡本同志やPFLPの同志がジュネーブ協定にもとづく捕虜交換で、イスラエルから釈放された時には、リビアまで来て歓迎会に参加し、敬意を表していました。そのとき、社会主義国で治療できる国を探して、岡本を守ろうと言ってくれました。以来、私もハバシュとその件の交渉に各地に行ったりしました。でも、岡本同志のことを考えると、やっぱり日本人の仲間と共にあることが良いのではないかとハバシュに話して、アラブの安全な生活の場を確保したりしたものです。

PFLPの歌にもありますが、ハバシュのことは「プロレタリアの先生」というように歌われて、尊敬される位置にありました。アラファトは、通称「アブ・アマル」(アマルのお父さんの意味)で、父のイメージですが、ハバシュは「ハキーム」(ドクター、博

士の意味)と呼ばれ、「先生」のイメージでしょうか。尊敬される位置にありました。

2000年には、PFLPの大会でアブ・アリ・ムスタファに議長職を譲って、正式に議長から退いています。PFLPの綱領路線は1967年に、ハバシュ議長のイニシアチブによって定められてきたものです。創立以来、PFLPは4つの敵(イスラエル、世界シオニズム、帝国主義、アラブ反動)を規定し、アラブ人民の革命の一環として、パレスチナ革命を実現することをめざしました。この戦略方針は、反植民地闘争を闘って来たハバシュの理想に燃えたプロレタリア革命の願いでした。

しかし、アラブの各国親米政権は、アラブ革命を唱え、自分の権力に対立するPFLPの路線政策の弱体化をもくろんできました。サウジアラビア、湾岸諸国中心にアラファトを支持し、湯水のごとく石油を使い、その政治力、財力で、PFLPをつぶそうとして来ました。70年のヨルダン内戦の後、アラファトは、ヨルダン王政、アラブ反動に対決する路線を、「反イスラエル、反シオニズム戦線」に切り縮めてフセイン王政との共同へと変更して来ました。

それらは、PFLPとアラファトの間で、ハバシュとアラファトの路線対立となっていきました。74年には、PLOの「ミニパレスチナ国家」路線に反対して、PFLPは1979年まで、PLO執行部から脱退していました。PFLPは常にアラファト路線を批判し、「オスロ合意」に対しても反対して闘いました。ハバシュの路線戦略を裏付ける兵站力財力は、ますます厳しくなっていました。闘いは人間の意志と同時に兵站財政の持久する力が不可欠です。ことに、東欧、ソ連崩壊を経て、中東における人民革命勢力の財力、兵站力は、さらに枯渇していきました。

そうした中でも、PFLPは被占領地の闘いを重視し育てようとして来ました。時代の証人であり、50年、60年代の「ナセリズム」や「アラブ民族運動」を総括して、PFLPを結成したハバシュのイニシアチブは困難で偉大なものだったと改めて思います。哀悼の思いを込めてハバシュ議長やPFLPのイニシアチブの時代を考えています。

「アナポリスの中東和平」から1月のブッシュの中東訪問と、政治的なプロパガンダが続く中、パレスチナは分裂したままです。その上にアッバス大統領らは、人民に糾弾されないように、巧みに分裂を利用して自分たちの勢力拡大とハマス制圧をもくろんでいます。アッバスのこうしたやり方は、アメリカ、イスラエル

オリブの嶺 第7号

の利害に一致し、犠牲はパレスチナの住民たちに強いられたままです。PFLPとムスタファ・バルグーティの「パレスチナ・イニシアチブ」は、統一を呼びかけ実行して来ました。しかし、アッバスは応じていません。

1月下旬、ジレンマの突破は、エジプトとの国境取っ払いの闘いとして実現されました。まさに、姑息な政治を超えた人民の生存の闘争は、反占領、反制裁の闘い、あたりまえの暮らしを求めて爆発しました。ブッシュの「中東和平」のショーや駆け引き、思惑が無力なものであることを示しました。

1月には、接見禁止で会えなかった何人かの仲間たちと再会できました。皆顔つきも老いておらず、若く昔と変わらない元気な様子には、びっくりさせられました。ありがとうございます！これから夏までの短い間の貴重な再会や新しい出会いを楽しんでいきます。

今日2月1日には、友人が面会の時「これ読みましたか？」とかざして見せてくれたのは、『情況』の「若松孝二反権力の肖像」という私の一文でした。判決前日の12月19日の集いに若松監督はスピーチもしてくれ、映画も一部上映するとのことでした。連帯に伝えなければと、あわてて公判の前後に書き上げたものでした。ちょうど年末の便の立てこんでいた時で、弁護士経由で原稿が届いたのか、確認できないままにいました。あ、出ましたか？『情況』からはまだ知らせはありませんでした。

友人たちから夕方に多数の手紙、本を出版した話や新年会の話。友人の様々な情報は、うきうきと楽しく



させてくれるものです。手紙を読んでいると、ニュース。3人の死刑執行があったとのこと。つい2、3カ月前にも死刑執行があったのに……。刑事訴訟法の規定に近づけるということに楯に、世界では「執行停止」が常態化していくというのに、どんどん殺そうという腹づもり。死刑執行停止を！と抗議と共に叫びたい。もしかしたら、朝の風によって届いていた女性のマイクの声は、聞き取れなかったけれど、このことだったのだろうか。

2月2日 高校の友より届きしはがきの文

17歳の我が青春の跡

今日は「土曜日」。大学時代の旧友が集まってきているはず。きっと上告審の方向や見直しなども語っているでしょう。大学の旧友が大学のすぐ近くに開いた店がいつもの盛り上がるの場です。今日は出版された旧友の本の話とか、きっとまた語り合うのでしょう。ちょっと寒そうな空を見上げつつ連帯。

また、去年、関西の方々が柳田健さんの名で連帯の「歳暮」を各方面に送ってくれたようです。私たち「日本赤軍」や「よど号」の人々など、海外に居た人々にも時効が適用されるべきと、弁護士たちと共にアピールを行ってくださっているようです。実情などはわかりませんが、関西の「さわさわ」の方々も共同してくださっています。

限界や誤りをもって闘った時代と事件ではあっても、正義の生きる闘いの時代のできごとでした。今の司法で、「反テロ」の中で、不当に裁かれることを許さない力強い声として感謝し、連帯に伝えていきたいと思えます。

また、高校時代の旧友から、昭和38年8月22日付けの私の葉書の文面のコピーが届いてびっくりです。45年前の葉書の文面には、ちょうど小さな運動をやって、新聞に出てしまったことを後悔している様子です。

「新学期からどうやって学校みんなに会おうか心配でたまりません。本当にどうしたらいいのでしょうか。毎日新聞の人に（親切運動は）まだ始めたばかりだし、大きくなりたくないからと言って断ったのですが、3面トップに出てしまったことは、もう、とりかえしがつきません。毎日すごい手紙が来ます。迷惑です。7月23日に第1チャンネルのテレビのビデオもとりに来ました。自分が判らなくなりそう。町田の市長さんから呼ばれたり、中学生にインタビューされたり、バカみたいです。会って一杯話したいです。やっぱり親

友が一番好きです。○君は完全に昔の人です。さようなら」なんていう文です。よく取っておいたなあ、友人は……。接禁解除で、高校時代の友人に賀状を出して、交流していたうちに、そんな昔の葉書まで持っている人が居ました。友人というのはすごいな……と思っています。また、当時の自分の若さや小さいひたむきさを少し思い出してひやりとしてしまいました。

2月3日 統一を！ 遺言残して逝きし君

雪の節分パレスチナを思う

鬼打ち豆心の中の鬼退治と

一つ二つと節分豆喰う

雪の朝。点呼前に目覚めて空の外を見ると、ルーバーの間に雪景色。夜中に積もったようです。見上げるとほんの少し粉雪が舞いながらルーバーの隙間から入り、建物のコンクリートを濡らしています。

雪は懐かしい思い出を次々と運んでくるものです。ルーバーの隙間を見ながら、ちょうど今頃銀世界に染まっただろうベカー高原を思い返しています。ベカーの山岳地帯、通常の通いなれた道でも、吹雪くと前後左右がわからなくなることもあります。吹雪のために、危ないことがあった数々のエピソードと仲間の顔が浮かびます。節分の日の雪。明日は立春ですが、寒さはこれから本格化するのでしょう。

ガザのエジプトとの境界の壁の爆破による抗議行動が先月23日に起こりました。22日にも、女性たちが中心になってガザのラファ境界門を開けるようにデモ行進を行って来ました。

そして、22日には、リビアを議長団とする国連安保理で、緊急会議を開いて、イスラエルの集団制裁によるパレスチナ自治区ガザの人道問題の打開をめざしていました。物資、人道支援関係者の往来などを求める安保理の声明を議長声明案としてリビアが提出しましたが、アメリカは拒否しました。23日は、引き続き討議が予定されていましたが、アメリカの妨害で採択は無理と言われていました。

こうした国際社会の仕打ちに対して、応えるように23日の「国境取っ払い行動」が起こったわけです。

『まるでお祭りのようだ。生活苦の悲劇が毎日続くが、久しぶりに喜劇を体験できた』と、皮肉をこめて語った」と、封鎖のために不足している買出しに3回国境を往復したというガザ住民の声を新聞も伝えています。止むに止まれぬ住民たちの意向を受け、ハマスの支えのもとで、武装勢力が計画的に国境の壁を破壊したよ

うです。そして、これまでに数十万人がエジプトとガザの間を買出しに往復しました。この機会にガザ制裁を考え直すべきだとする国際世論、アラブ世論に対し、イスラエルは拒否しています。また、エジプトの、ハマスとファタハの和解呼びかけに対し、自治政府はハマスとの討議を拒否しています。加えて、イスラエルは電気や物資、人の流入を阻止した制裁を強める一方です。1月31日、ハマスのミシャール代表団は、今後の国境管理について、エジプト政府と討議するためにエジプト入りし、パレスチナ・エジプトによるラファ通関の管理を提案しているようです。

2月1日には、ラファ国境を閉じるようにというイスラエルや国際社会の声に抗して、国境を開けて置くべきだというデモが起こっています。そして3日にはハマスとエジプト政府との話し合いを踏まえて、通関の協力体制をとるとして、ガザ境界は再度閉じて、前の状態に戻すとのこと。制裁と封鎖によって、底をついた日用品、建材、薬品など生活必需品の一定の確保が住民レベルに行き渡ったところで、エジプト、ガザのパレスチナ側双方で、一旦国境を閉じて、制裁解除を求めることになったようです。

先月亡くなったハバシュ元議長の葬儀が、自治区や西岸やガザのたくさんの街で行われた様子を伝えるPFLPのネット記事が届きました。さらにアッバス大統領がハバシュの死を悼んで、3日間の喪に服すと宣言していましたが、全世界のPLO事務所やパレスチナ大使館で、弔問記帳を受け付けているようです。さらに、世界各地、各組織からの弔文が寄せられたことが記されています。レバノンのサイダ、アイネヘルワ・キャンプでは、数千人の追悼集会がもたれたとのこと。『理想と夢をずっと求め、決して夢を失わなかったし、人民を決して裏切らなかったハキーム！ハバシュ！……統一！統一！統一！これがただ一つの彼のメッセージだ！』泣きながら棺を担ぎ、彼の側近たちは、この葬儀の中で、各地の人民に統一を訴えています。パレスチナ革命の総意として、ハバシュの死を悼み、現状のハマスとファタハの対立の解決を叫びつつけている様子は、哀しく必死です。

「統一こそ力だ」とPFLPの人々が書物でなく数々の直面する出来事の中から握りしめた教訓は、私たちの軌跡ともつながります。80年代の闘いに向けてPFLPは70年代の闘いをとらえ返しました。武装闘争や国際ゲリラ戦の総括やPLO執行部脱退を問い返し、PLOに復帰しました。そして、80年代、

オリーブの樹 第7号

政治闘争として、PLOを軸に、アラファト路線に対峙する政治的イニシアチブの中で闘いながら、いつも統一を求めつづける役割を負って闘っていきました。

また、すでに当時ソ連からキューバに至るまで、ほぼ、世界のいわゆる「社会主義」諸国の実情を踏まえ、私たちが70年代の総括の中で、「社会主義論」がなかったことをとらえ返したものです。「日本をどんな国にしたいのか？」社会主義の国の人々は、よくそんな質問をします。ソ連のようにはなりたくないし、アジアの国々のようにもなり得ない。抽象的な「世界同時革命」でなく、実態的に日本をどうするのか？「日本人民共和国の」の中味が問われました。

日本の現実を直視し、アメリカの日本の主権侵害の基地や安保をなくした平和イニシアチブの日本の上からの官僚支配に反対し、人民の下からの自治の力が社会を動かしていくような日本、これは人民の参加という意味で、「民主主義の徹底」の参加民主主義を基調とする社会作りこそ問われていると考えました。企業でも、学校でも、官庁でも、民主主義の徹底によって分配の再配置も可能だからです。そして、また、それを実現する党の役割は人民の知恵や行動の統一を支えることだと考えてきました。そして統一を求めた時、レーニン主義のみならず、社民路線の内容も意義もとらえ返しました。80年代は、第二インターのベルンシュタイン路線やグラムシの学習会も東欧の友人たちともやりながら来ました。PFLPの仲間もいましたし、ハバシュが顔を出すこともありました。

80年代は、レーガンの反共攻撃に対して、東欧ではワルシャワ条約機構の制限主権の保安強化と共に、他方で、政治的にはゴルバチョフ登場を経て、社民路線が検証されていた時代です。「統一」を文献上の観念としてではなく、現実を解決する人民革命の戦略の環として、様々にPFLPは80年代以降政治闘争を闘ってきました。実体的な力なしに「統一」は戦場で訴えることはできません。ハマスやファタハの実際の分岐に統一を求めるからこそ、自前の主体的力を育てなければ……PFLPの困難な闘いから学びながら、私たちがそう思ってきました。「統一！ 統一！ それがあった一つのハバシュのメッセージだ」と訴える友人たちが浮かびます。

夕方、16時20分が夕食時間ですが、セロファンに入った節分の豆が配膳に添えられていました。旧舎では寒い中、窓を開けて樹々や地面に向かって、一杯「鬼は外！ 福は内！」と豆まきしていました。新舎

になってからは、それができません。密封パックのために窓は開かないし、鬼打ち豆を持って鬼を追っても出口がありません。心の中の鬼退治でもしようか……と、一つ二つと本を読みながら豆を食べていました。外は寒そうです。独房も寒い。新舎は「冷暖房完備」と言っても拘留者の居る所には暖房なしです。係員の働く廊下には暖房が入っていますが、舎房は寒いのです。旧舎のようにアウトドアのような風が入り込むことはありませんが、火の気のない部屋に着膨れて作業しています。寒いせいで差し入れの花は枯れもせず、バラ、ゆり、チューリップ、スイトビー、水仙、ストックと咲き競っています。そして今は、日本水仙の良い匂いが部屋の中に満ちています。

2月4日 立春の残雪光る獄の朝

冬の花残り咲きおり

今日は立春の週明けです。運動房に出て、通路からごんで敷地を見ると、一面の銀世界。人が通らないので、遠くまで真っ白です。プランターのパンジーもまだいくつか咲いています。節分の日、戸口に魔よけに飾る冬の小さな樹がプランターにあるのですが、秋から続いてまだ小さな白い花を咲かせています。久しぶりに雪が積もったのは、変化があつてうれしいことです。走った後、裸足の冷たい足は水でジャブジャブとたわしでこすると感覚がないくらい。でも、その後は、房にもどると、ほかほかします。

前田先生たちの弁護士選任届の用紙を金曜日に受け取っていたので、今朝指印をして投函。

ちょうどそこに旧友のAさんの面会です。雪の中、道は混乱していたらしい。本の批評を書いた手紙はなんだかまだ着いていないとのこと。でも、「本は好評でもう増刷が決まったよ！」とニコニコ。「おめでとう。良かったね！」と喜びましたが、本のことを批判したり校正点など話しているうちに、あつという間の10分。本当に短いな……ありがとうございます！ でも、もっと長い時間なら、昔のようにケンカになるかも。

友人から、ハバシュのこと資料で知らせてくれたものが届きました。ありがとうございます。

2月5日 夕膳に添えられしいちごパック入り

赤い実つぶして香り独占

今日も晴天。残雪がほんのところどころ朝日に光っています。さっきまで白一面だったのに、もう早くも溶けてなくなってしまったようです。

今日は大学時代の同世代の元中核派の人が面会に来

ました。「当時、ブントのRやIに和泉校舎でいじめられた！」などと楽しく話しているうちにあつという間の10分。わざわざありがとうございます。3月の「土曜会」で、ブント批判を一杯やってください！

ちょうどアブ・アリ・ムスタファ・ブリゲード (AAMB) の2月2日付けのレポートの英文が届きました。PFLPの軍事部隊です。2008年に入って、イスラエル兵を狙って11回のスナイパー作戦と様々な武器を使った100回の作戦を行い、1月の間に110回の行動を起こしたことを報告しています。100回の作戦のうちには占領イスラエル兵をターゲットとしたミサイル発射や、爆弾闘争などの攻撃を行ったことを明らかにしています。

1967年のPFLP結成以来、PFLPは被占領地でずっと武装闘争を続けてきていました。当時は、通称「ゲバラ」と呼ばれたリーダーがまだ生きていた70年初期ガザで活発にゲリラ戦を展開しては、ペイルートの機関紙『アル・ハダフ』の中で、「軍報」を乗せていました。

今はネットで「アブ・アリ・ムスタファ・ブリゲード 軍情報局」として、1月の戦果を公表しています。日本ではあまり聞こえないことですが、占領下では日常的な軍事攻防は半世紀近く続いています。PFLPは、「統一」戦略のもとで、主体力量形成として、軍事行動を活性化しているようです。アブ・アリ・ムスタファ議長が殺されてすぐに、イスラエル観光大臣を報復制裁する力はあったように、軍事力は一定蓄えているようです。

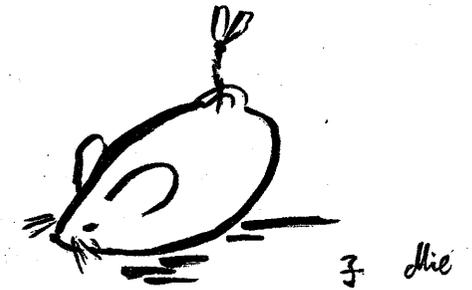
今日の夕膳には、珍しくパックに入った10粒のいちごがありました。皿にひろげて箸でつぶすと、いちごの匂いがひろがります。

2月6日 面会の友を待ちつつ遠い日の

梅の城跡思い出してる

起きたら曇り空。運動房に出ると、なんだか雪が今にも降り出しそうな寒さです。立春を越えたら、逆に本格的な寒さに入りました。

今日、友人が暖かそうなフリースのふかふかした部屋着トレーナーを送ってくれ、さつき受け取りました。ありがとうございます！ 暖かいです。すぐ着ることにしました。ちょうど友人の面会。ふかふかトレーナーで再会。「農場はまだ黒字には時間がかかるなあ……。でも、人と人と出会い、皆楽しそうにやっていますよ！」と教えて



くれました。場があつていいなあ。なんか案外みな社会性があつて、他の経営もまあまあとか。逮捕で迷惑をかけてしまった友人たちなのに、ニコニコと話をしてくれました。山羊のチーズも食べてみたいけど、ちょっと高いらしい。今度「オリーブの樹」に広告出したらいいのに……。広告出したら逆に売れなくなるかな？ とにかく、ありがとうございます！「エ？！もう時間？！こんなに短い？！」と言いながら、手を振って分れました。

午後、カスミ草とピンクのバラが届きました。「9条の改定阻止の会」の文、「はなみ通信」、「解放」、「人民新聞」など受け取りました。ありがとうございます。

夕方、手紙で森本さんから取り急ぎの「さわさわ」の連絡の中で、四行詩を送ってくれました。『オリーブの樹』76号『独居より』の中で、ルバイヤートに返詩を作っておられました。連詩を募っておられたので、作ってみました」とありました。せっかくなので、前から書き出します。

若き日の絵巻は早くも閉じてしまった
命の春はいつのまにか暮れてしまった
青春という命の季節はいつ来て
いつ去るともなしに過ぎてしまった

(オマルハイヤーム 35)

命の季節は見えない者には見えない
聞こえない者には聞こえない
しかし嘆くことはない 君次第さ
見ようとしたら いつでも君の中に在る
(私の作)

人間の愚かしさは青春の愚かしさ
愚かしさありてこそ青春は輝く
愚かだと笑う人から最早命の季節は過ぎ去っている
されば君よ われわれの命の春は今ここにある
(今回の森本さんの四行詩)
今日こそわが青春はめぐって来た！

オリーブの樹 第7号

酒を飲もうよ、それがこの身の幸せだ。
たとえ苦くても、君、とがめるな。
苦いのが道理、それが自分の命だ。

(オマルハイヤム 16)

と続けてみました。達観したシニカルなオマルハイヤムのルバイヤート(4行詩)は、本を開く度に味があつていいものです。オマルは「達観」を、私たちは「今の生きる姿」を。そんな繰り返しの連詩は面白いです。もっと続けましょう!

2月7日 蘭の花百合バラの花見つ思うこと

過去にこだわり老いてゆく君

今日は本来風呂の日でした。でも、9日からの3連休にむけて風呂は金曜日にならざらしたとのことで、運動のみ。8時20分から運動房に行くと、すごい晴天。夜中に雪が積もっていたのが所々に残っています。

午前中、10時ごろ女区主任が話しがあるとドアを開けて登場。「あなたの荷物が多すぎます。昨日も房内荷物多い人は強制的に全部一つ一つ点検してすごく少なくまとめてもらいました。カバンと籠と棚に荷物を収納する決まりだけど、あなたのは多すぎる!」と、荷物の整理を要求されてしまいました。「いや、年末にはこれでもコンパクト化したんですよ。上告趣意書を書いたら、もっと公判資料とか整理するから待ってください」と言いました。「それでも、食料や日用品や本を減らして!」とのことでした。うーん、整理には受信物とか内容の整理しないといけないのですが、時間が取れない……。3連休にも、計画一杯なのですが……。とにかく3連休の1日は、荷物整理に当てないと仕方ないようです。公判の資料や読むべき資料、受信物、これから整理しないと……。時間が足りないので……。。

午後、蘭の花差し入れありがとうございます。渡邊弁護士が見えて、前回の私の郵送した弁護士選任届に指印証明の東拘印が欠けていたと、取り直しに来てくださった。すみません。先生も出張など多忙らしく、私の方から送ってくれるように頼んでいた郵便物は滞っていたとのことでした。あ…、それで…、友人から出したという手紙が着かないと問い合わせがありました。

2月8日 春節に走り走って突き抜ける

怒りを呑んだ息白く吐く

今日は、私の風呂の順番は一番後のしまい湯で、午後の予定です。運動房でいつもより長く走りました。運動の時間は30分ですが、ほとんど30分走りつづ

けました。今日は風が冷たい。思い切り走るとやっぱり体力がない……。ゼイゼイしています。

3連休の前のせいか、来週になるかと気になっていた資料などが届きました。「さわさわ」の方から送ってくれたものも届きました。またちょうど「独居より」を書くのにほしいPFLPの資料なども届きました。ありがとうございます。

それから、鹿砦社の松岡さんの送ってくれた本やレコンキスタ(「さわさわ」の支える会の呼びかけの載っているもの)、それに『紙の爆弾』よりももっとケバい雑誌『実話マッド・マックス』2月号に掲載されているメイさんと若松孝二監督の対談を送ります」と、雑誌の対談コピーも送ってくれました。ありがとうございます。

昼前にSさんの面会、ふかふかトレーナーありがとうございます!とても気に入っているの、着て見せました。話したいことは一杯あるけど、速達を送ってくれたというので、2月6日の集いなど聞きたいいろんな話は、手紙を楽しみにしています。

午後は、『冤罪ファイル』創刊号、『創』3月号、『紙の爆弾』などの本を何冊か受け取りました。それから前田弁護士の面会。

夕方には、手紙が何通も届いたのですが、「送り状」だけしか受け取れなかったものの中に、「控訴審判決文」とあります。12月20日の意味不明瞭の判決に対して文書でやっとな判決文ができたようです。早く読みたいです。でも来週の連休明けです。裁判所の慣例とのことですが、判決文を被告に渡すのが大変遅いのです。本来は、判決日に文書を渡すべきです。第一審の時、地裁の2月判決に対して、判決文は4月に届きました。今回も12月判決に対して、今やっとな弁護士が受け取り、コピーして送ったというところからです。これから判決を読んで、上告趣意書の作成となります。また、多忙になりそうです。

2月9日 数え年7つの年に買い求めし

母誕生日の白足袋一足

曇り空の3連休のはじまりです。天気予報で、午後は雪のマーク。PFLPやレバノン情勢についてアルジャジーラの資料読み込み。週末なのに、友人たちや知らない方から何通も手紙が届きました。

久しぶりに、山本さんからの手紙もあり、丸岡さん、泉水さんの様子を知らせてくれて、少しほっとしました。丸岡さんには山本さんが1月下旬に面会に行ってきた様子が書かれていました。体力は厳しいようです

が、気概はあって元気だとのこと。彼らしい様子が浮かびます。

山本さんの手紙の中に、面会希望者の予定がありました。「さわさわ」に私が書いている70年代の友人Nさんが会いに来てくれるとありました。Nさん?! 覚えてますよ! 「オイ! N、金何とかならんか!」なんて、頼っていたのを思い出します。赤軍派には来なかったけど、機関紙作りのはじめに、同志社勢が活躍した時の友人です。

また、それから、去年1月もとても大切な先輩の同志を失いましたが、その友人が近々会いに来てくれるとのしらせ。感謝です。いろいろの方々、旧友、新しい友に会えて、うれしい新年です。

短い時間、やるべきことをたくさん抱えていますが、やれるだけ、とにかくがんばって進めます。上告趣意書もこれからです。

PFLPに送った帛文の日本語文と英文も届きました。ありがとうございます。

今日は母の誕生日、戸平さんも今日だったと思います。純三さん、吉村さん他にも友人たち、何人もこの頃が誕生日です。ハッピーバースデー!みんなに。そしてまた3月の「オリーブの樹」の出る頃の土曜会の友人や娘たちにハッピーバースデー!

そして2008年、68年のPFLP創立40周年のこの年、私にとっても貴重なこの年上告審や交流の

読者からの声

*重信房子様

20日の判決は新聞で読みましたが、その後Yさんに電話で連絡を取り裁判の様子をうかがいました。温厚なYさんが、ひどく怒っていました。

拙速主義の行きつくところ厳罰主義で、一体この国はどうなっていくのでしょうか。

私の予想では、20年は動かないものの未決通算がかなり入ると思っていましたので、当然出獄の日が早まると即断しておりました。

正月以来、順調な天候が続いています。

シャバは過ごしよいですが、壁の中は想像もつきません。

岐阜刑の無期囚の人からの年賀状に「老囚には寒さが恐ろしい」とありました。

めしうと たくみ
囚人に飛驒の匠の国の冬

中で、共にまた語り合いたいです。どうか、よろしくお祈りします。

追記 2月14日

今日、控訴審12月20日の判決文を受け取りました。地裁の時もそうですが、判決日に判決文を書き上げておらず、このように遅れるのが慣例とのことです。被告の控訴趣意書などは、期日がきっちり決まっているように、裁判長は判決日に判決文を持って宣布してほしいものです。

内容はすでに第5回公判報告で示した以上ではありません。地裁判決を支持した棄却内容は、地裁判決よりも雑です。これに対して、上告趣意書の準備がこれから問われます。どうしたら伝わるだろうかと、もう一度資料全部を読み直ししながら、上告趣意書を書いていきたいと思えます。その準備作業がこれからです。

今日のバレンタインデーに、判決文がプレゼントでした! また、ちょうど12月19日の判決日前の集会の写真が届きました。発言者一人一人の写真です。みんなに感謝します。ありがとうございます。そして、上告の準備をして貴重なこの年を大切にすごしたいと思えます。

光満ちて寒さの底に新しい

命萌えはじむ2月の朝

ではまた。

たくさん書きたいのですが、これ以上体調が許しません。後日また。

2008年1月8日

東京都 U.

*カンパ送ります。

報道によると、1月末、ガザの壁を破壊したとの理由で、ムハンマド・ハルブさんたちがラファで暗殺されたそうです。イスラエル軍は車を狙った2回のミサイル攻撃で、2人づつ、4人殺害したようです。1昨年8月の「イスラエル軍のガザ撤退」は、当初から「ゲットー化政策」と思われましたが、いまや、壁は「隔離分断」のみならず、「封鎖・ジェノサイド」の手段になっています。人々が自由を求めて壁をなくそうとするのはあたりまえです。「ガザ封鎖を黙認する日本政府」―「虚構の国際社会」―「欺瞞の国際協力」を糾さねばならないと思えます。

2月6日

大阪市 T. M.

★PFLP ライラ・ハリッドさんから12・19集会へのメッセージ★

同志たち、友人たち

パレスチナ人民と私自身の名において、全ての皆さんに連帯の挨拶を送ります。

真の国際的な解放戦士として敬愛する偉大なマリム重信同志に対する私の気持ちを伝える為に、今日、どれほど皆さんと共に居たかったことか！

私たち全員が彼女を誇りに思うし、同時に、彼女が長年の間パレスチナ人民と日本人の人々の間に強い絆を築いたことを更に誇りに思います。その闘いは、彼女の個人的な利益のためではなく、切っても切り離せないこの世界の解放への大義のためでした。

同志たち、そして友人たち、

私たちパレスチナ人は、わが祖国をシオニストに占領されアパルトヘイト化されている犠牲者ですが、偉大な同志マリム重信を釈放させる皆さんの運動を支持するし、同じように、私たち自身も、PFLP議長アフマド・サーダト、167名の牢獄の闇の中に囚われている母親たちを含む女性たちを初めとする11,000人の、イスラエルの獄につながれたパレスチナ囚人の釈放の為に闘います。

私たちパレスチナ人が女性や母親について語る時はいつも、すぐ、母親であるマリム重信同志、また、獄吏たちには単なる犯罪人にしか見えないけれど、娘や息子たちの自由のために闘い、次に続く世代のためにより良い未来を築こうとして闘ったマリム重信同志のことに思いを馳せます。

私たちは、獄中の敬愛する同志たちに対して一つの責務を負っています。その責務とは、戦って囚われた

★カルロスからのメッセージ★

親愛なる同志マリム

この歴史的な日(註:PFLP創立40周年記念日)、私はあなたと我々の英雄的な同志たちに対して、共感と連帯を捧げます。

私は日本の司法当局が歴史的真相を認め、ひどく長い拘束からあなたを釈放することを願っています。

人々の大義を、パレスチナ、イラク、日本、そして、あらゆる地の人々の心の中に、闘って囚われた人々が抱いていた解放の大義を息づかせ続けることだと思います。もう一度言いますが、解放への大儀は世界中で分断できないものでだからです。

同志たち、友人たち、

私たちは、反帝国主義、反シオニズム、反グローバリズムによる国際運動の一翼として、世界中の進歩的な民主勢力に、人類の敵によって私たちに課せられた不正義の残虐性と直面するように呼びかけます。

グローバリズムに対する闘いをグローバル化しよう！

同志マリム重信に

あなたは、私たち皆にとって、かつては全てを投げ打って闘い、今なお偉大な女性としての大なる典型を私たちに与え続ける解放戦士のシンボルです。いつも頭を高く掲げてください。あなたのパレスチナ人同志たちと友人たちは連帯と尊敬の挨拶を送っています。

最後に、私は、マリム重信同志と他の獄中同志の釈放を日本政府に要求します。何故なら、彼らは、パレスチナ解放闘争でパレスチナの人々の為に行った人道支援をこそ表彰すべきだからです。

パレスチナと日本の人民による友情に栄光を！
共に、より良い未来に向けた闘いを！

ライラ・ハリッド
パレスチナ民族評議会議員
PFLP政治局員

2007年12月20日

あなたの自由の獲得は、すなわち、我々全員の勝利です。

勝利を共に！

革命の名において
カルロス

日本赤軍の歩み
闘いの路線的な捉え返しとして

—16—

重信 房子

13章 ソ連・東欧崩壊——90年代の闘い

1991年8月、私たち自身の改組として非公然に「人民革命党」を結成した。当時の私たちをとりまく情勢はどのようなものであったのかふり返ってみたい。

1 世界史の転換期としての90年代

89年の東欧崩壊から90年のイラク、サダム・フセイン大統領によるクウェート併合宣言を経て、91年1月湾岸戦争がはじまった。そして8月、ちょうど「人民革命党」として私たちが出発した直後にソ連のクーデターが発生した。その後ソ連邦は音をたてて崩壊していくことになる。ゴルバチョフ大統領はクーデターの失敗が判明した8月21日ののち、24日には共産党の解散を勧告し、党書記長を辞任した。これはソ連のみならず世界の反共勢力に力を与えた。ロシア連邦をひきいたエリツィン政権はゴルバチョフの足下をくつがえし、「独立国家共同体(CIS)」の創設をすすめた。エリツィンは社会主義の道を放棄し、公然と資本主義の道を歩みだし、国際的にはアメリカの支援を受けながらソ連の最後の解体をうながした。CISの創設にともなって、実体も足場も自ら失ったゴルバチョフ大統領は12月25日、大統領辞任を表明し、ソ連はここに消滅した。

これまで、制度的に統制されていた旧ソビエト連邦内の各共和国内共和国間の矛盾は、その後新しい内戦を激化させた。ロシア人と非ロシア人をめぐる民族問題や各共和国内の少数民族問題など、民族紛争は経済的危機と共に生存の闘争として増大した。89年崩壊のはじまった東欧も、国外にいて政権批判していた人材や資本が国内に戻り、また持ち込まれながら、西側の市場ルールや「民主主義的」ルールにのっとった国の再建がめざされた。また旧ユーゴスラビアはスロベニア共和国の独立から各共和国間と、内部の民族問題の矛盾によって複雑な内戦となった。さらにボスニア・ヘルツェゴビナをめぐって泥沼化し、欧州介入で解決しえず、国連軍の導入、さらには90年代を通してNATO軍の介入へと拡大された。

20世紀初頭のロシア革命を経て、資本主義との競合の中で、革命と社会主義をめざした国々が、自国民の異議申し立ての中で、敗れていった90年代であった。ロシア革命の時代、搾取や圧政に抗して人民の自由と民主主義を実現するために、みなこぞで革命に参加してきた。この希望の可能性を損なったのは「スターリン憲法」といわれた戦時体制の継続を固定した法と制度であったといえるだろう。この制度は結局当時資本主義に対する唯一の優位であった人民の創造する意志と力を抑圧した。「プロレタリア階級独裁」は短絡的な党による独裁に転化していった。党は憲法に保証された「超法規的存在」として独裁的権力となり人民を統制した。解放の果実は抑圧権力に転化し、人民の反抗を育てた。反共反ソ戦略のもとで、ロシア革命以降ずっと社会主義制度の解体をめざしたアメリカ・西欧は、彼らの利益のためにこうした人民の闘いを支持支援した。ソ連東欧の社会主義は自己変革自己革新にたち遅れ、あるいはその道をもちえず崩壊した。

ブッシュ(父)大統領は、ソ連東欧の崩壊を受けて、ポスト冷戦の「新世界秩序」を米帝の一元的な支配として再確立しようとした。湾岸戦争はその力を宣言する舞台となった。しかし湾岸戦争前からはじまっていた米国内の不況は、ブッシュ政権の経済政策批判としてたかまった。矛盾は「ロス暴動」として爆発した。レーガノミクスによる資本の自由は軍需産業をうるおしたが、財政赤字は拡大し、その負担を低所得層にまで押しつけ、貧富の差が拡大したのである。その結果、湾岸戦争の勝利をバックに再選される予定のブッシュは、経済の構造的改革を訴える民主党のクリントンに敗れた。

ソ連の崩壊を受けて、ソ連東欧は資本主義化のはげしい流れにさらされる90年代となった。グローバル企業による弱肉強食の経済支配は、各国の国民経済と矛盾をきたした。ポスト「冷戦」の新しい秩序のないまま、自然発

生的な民族主義・排外主義の勃興を拡大させた。国連による介入や調停は、ソ連の崩壊以降ますますアメリカの道具と化した。

経済のグローバル化にともなう、国際機関が「新世界秩序」の推進者として「複数政党制」、「市場経済」、「自由貿易主義」による世界の再構成をめざした。国連はその資本主義市場経済路線に対する挑戦に対して、制裁行動を正当化する道具となった。当時の国連のガリ事務総長は国連中心の世界秩序を求めて国連機能強化を提案し、国連が独自の軍事機能を持つことをめざした。しかし国連の一国一票の原則強化に反対し、自国の利害の道具としようとしていたアメリカは当然反対して、ガリの退場をうながし、アナン事務総長をバックアップした。アメリカの意を受けたIMF・世界銀行は、ポスト冷戦の国際政治経済の再構成をめざした。ことに東欧の再編は親米勢力によるマフィア経済や政権奪取の温床となった。

90年代を通してみると、東欧ソ連崩壊後、グローバリズムが進展する政治経済的な条件と共に、IT技術革命による情報通信分野の急速な発展と、国境を越えた独占資本間の巨大合併が進んだ。それによって多国籍企業が一国の経済規模をもはるかに上回るグローバル企業の時代に入った。鉄器の発明、産業革命に優るとも劣らない電子技術革命は人類社会の生活様式の転換をうながす90年代となった。そして、また情報技術の革命は経済活動投機分野をも変えた。大規模な国境を越えた投機資本の移動は、ブラジル、ロシア、アジアなど各地の通貨危機を生みだし、世界を恒常的に不安定なものとした。

90年代の特徴は、ソ連東欧の崩壊の中で、こうしたグローバリズムによる支配が進行し、世界の二極化をもたらしたことである。国家レベルでも格差が拡大し二極化が進行したと同時に諸国家内の国民の中にも格差の増大、二極化が進行した。

2 中東における変化

東欧ソ連の崩壊は中東地域に新しい条件をつくりだした。これまでの帝国主義による「反共反ソ戦略」と、それに照応した「力の均衡論」による「緊張緩和」のバランスのもとにあった中東地域も変化しはじめた。

それは湾岸戦争を通して示された。

第一に、アメリカの一極的な力の増大は、中東におけるこれまでの「力の均衡論」を無効にした。軍事バランスのもとに対峙していたシリアは、新しい戦略的条件を模索せざるをえなくなった。第二に、中東諸国政府はアメリカの中東政策のダブルスタンダードを批判しつつ、アメリカのイニシアチブによる中東和平のパラダイムの中での政治攻防にシフトせざるをえなくなった。ことにこれまでソ連と協力関係にあったシリアや南イエメン、北アフリカのアルジェリアなどもそうである。第三に、イスラム勢力の政治活動としての擡頭である。民族主義がさまざまな形で国際的な生存の闘争で力を増大させる中、アフガニスタンで「反共戦士」として、アメリカの支援のもとに闘っていた「ムジャヘディーン」イスラム戦士たちは各国に帰り、イスラム運動のイニシアチブをとった。

このように宗派的勢力が中東の権威主義的封建的支配、あるいは軍人政権に対して対抗する勢力として登場した。政権批判の武器は、かつての知識人による反体制「社会主義」イニシアチブから、イスラムによる社会的規範に根ざした復古的なイスラム主義にとってかえられていった。各国で民衆の意志を汲む宗教的勢力が政治勢力として登場してくるようになった。レバノンやパレスチナではイスラエルの占領に対する解放運動の勢力として登場した。福祉、医療など生活イニシアチブの中から育った宗派的勢力は、社会的公正においても、また人民に対しても誠実であり、人民の圧倒的支持を得ていった。

いっぽう中東における「市場化」、「複数政党制」、「自由選挙」の試みは、アルジェリアにみられるようにイスラム勢力が圧倒した。しかし政権がそれを認めず非合法化することによって、イスラム勢力は各地で政権に武装抵抗していくようになった。こうした条件の中にパレスチナ解放運動と中東和平交渉があった。

湾岸戦争を経て、圧倒的な力の支配を誇ったブッシュ・ペーカーイニシアチブのもとで、91年秋からマドリッド中東和平がはじまった。米の構想はイスラエル優位のもとに67年のイスラエルの占領地の一部を返還し、中東全体に「マーシャル・プラン」のごとく、戦後復興資金を持ち込んで、「市場化」、「複数政党制」、「自由選挙」のもとで、イスラエルを中心とする新しい中東秩序をつくらうとした。

91年11月には、ブッシュ政権は国連総会で1975年のシオニズム非難決議を撤廃する決議を採択させた。

しかしブッシュはその年の再選をはたせず、クリントンにとってかえられた。またイスラエルは、すでに合併宣言した67年占領地のシリア領ゴラン高原からの撤退を拒み、和平も進展させなかった。このシリア・イスラエル交渉で、イスラエルに圧力をかけたとして、ユダヤロビーはブッシュ・シニアとペーカーの政権を批判し、クリントン政権に乗り換え、ブッシュが敗れたといわれていた。

「マーシャル・プラン」として構想された「カサブランカ経済サミット」は、西側企業や政府の資金を呼び込むことをめざしたが、イスラエルに占領されたアラブの地がある以上、イスラエルの参加のもとではアラブ側は進展する条件はつくれなかった。米政権の思惑の経済復興プランは進まなかった。

また中東和平交渉において米・イスラエルはPLOを認めなかった。そのためパレスチナ人はヨルダン・パレスチナ代表団の一部としてマドリッド交渉に臨まざるをえなかった。ことに湾岸戦争でPLOがイラクのフセイン大統領を支持したことは、いっそう国際政治における米・イスラエルによるPLOつぶしの口実になった。しかしPLOは健在だった。87年12月以来の被占領地民衆のインティファダの石礮の不屈の闘いは、世界中にイスラエルの占領支配の不正をあげた。またパレスチナ人は、PLOが正式な自らの代表として在ることにあきらめず妥協しなかった。

湾岸戦争を経て、20回PNCが9月に開催され、そこで10月からのマドリッド中東和平会議参加を決定した。このPNCにおけるファタハ系の多数派決定に対して、反主流派はPFLPを中心にPNCで反対を声明しつづけた。「アメリカ帝国主義主導の和平会議への参加は、インティファダを抑圧する方向になり、パレスチナの民族的統一を促進するよりも分裂を拡大する道であり、投降だ」と非難しつづけた。そしてその後も、パレスチナは十組織声明で、87年インティファダ以降「オスロ合意」などの90年代のアラファト路線に一貫して反対を表明しつづけた。

10組織とは、①PFLP②パレスチナ解放運動（ファタハの反アラファト派）③PFLP-GC④サイカ（シリア系）⑤イスラム抵抗運動（ハマス）⑥パレスチナ共産党⑦パレスチナイスラム聖戦機構（イスラミック・ジハード）⑧DFLP（ハワトメ派）⑨パレスチナ人民闘争戦線⑩パレスチナ解放戦線である。

こうした反対の政治勢力やインティファダの力をバックに、PLOは和平会議路線へ踏み込んでいくことになった。中東和平会議は、「被占領地代表」として、ハナン・アシュラウイらが代表となった。PLOを排除しようとする米・イスラエルに対して、パレスチナ代表団は公然とアラファトと会いPLOに結集した。実際にPLOを排除したままではパレスチナ問題の解決がないことをイスラエルにも知らしめた。

PLO自身は湾岸戦争を経て、和平交渉に戦略的意義を見出しつつも、リクード党のシャミル政権のもとでその進展はなかった。湾岸戦争でイラクを支持したことで、湾岸諸国は報復措置として、パレスチナ人を国外に追放し、財産やPLOへの税金を没収し、PLOへの資金援助を打ち切った。それらは当時スンニ派の武装組織「ハマス」への支持となり、ハマスの力を増大させた。しかし被占領地の闘いは、パレスチナ蜂起民族統一指導部のもと政治的違いがあってもPLOもまたハマスも団結し、インティファダは人民の意志として広がりつづけた。

インティファダのパレスチナ民衆の意志によって、イスラエル国内は深刻な経済的・政治的混乱をきたしていた。兵士の厭戦気分も増大した。

92年6月、イスラエルに労働党政権が生まれた。ラビン労働党政権はパレスチナの分裂を図り、一方に被占領地のインティファダ指導部の国外追放を12月から行なった。そしてもう一方の手で、アラファト派と秘密交渉を行っていた。レバノンに追放されたハマスの人々らは、22台のバスに24時間以上縛りつけられ、垂れ流しを強要されて、レバノンに追放された。しかし、これはラビン政権の誤算となった。追放されたハマスやファタハの人々を国境地帯でレバノン民族運動が迎え支え、シーア派や在外のパレスチナ解放運動やイラン、シリアと連帯する出発点を作った。のちのハマスをより拡大させた（ハニヤ首相も追放されたうちの一人であった）。

他方でラビン政権はPLOとの接触を合法化した（イスラエルはイスラエル人にPLOとの話し合いなどの接触を法律で禁じていた）。そしてイスラエルとPLOの秘密交渉によって93年9月13日、「オスロ合意」に調印した。この合意はパレスチナの暫定自治に関する協定であり、パレスチナ自治に関する原則宣言が発表された。

政治宣言の内容は、

①イスラエルとパレスチナは相互の存在を承認する

わい-7の欄 第77号

②イスラエル軍は67年占領した領土から段階的に撤退する

③選挙によってパレスチナ自治政府を樹立する

④その後、パレスチナの最終的地位に関する交渉を行なうという内容であった。

即座にパレスチナ解放勢力から批判が噴出した。インティファダを終わらせようとするイスラエルに手を貸し、民主的機関の手続きなしにPLO執行部が行なった越権行為であり、認めることはできない、と批判が席捲した。ことに48年来の追放されたパレスチナの土地も難民をもないがしろにし、ただPLOの権威をイスラエルに認めさせることとひきかえに、パレスチナ民衆を犠牲にしたとして、PFLPやハマスら10組織による拒否戦線が形成された。エドワード・サイドも反対した。PLOを認めさせるために解放運動の一過程にすぎない「建国」を目的化し、民衆のインティファダの意志を損なったことを批判した。またイランはPLOを批判し、ハマス、ヒズボラなどの解放運動支援を表明した。いっぽう「オスロ合意」に安心したヨルダンもキャンプデービッド合意でアラブ諸国から絶交されたサダトの二の舞にならないことを確認して10月イスラエルと和平条約を結んだ。アラファトはパレスチナの人民解放路線を以降国家外交路線にとつてかえた。そしてアラファトはアラブの権威主義的政治権力の手法でさらにPLOの反対勢力を無視して進んでいった。

「オスロ合意」の後、94年5月、ガザにPLO本部を移し、7月、アラファトはチュニジアからガザに帰還し、熱狂的に迎えられた。10月にはラビン、ペレスとともにアラファトにノーベル平和賞が贈られた。95年9月にはパレスチナ自治政府が発足し、代表にアラファト議長が選ばれた。その年11月ラビン首相は極右のユダヤ人青年に射殺された。

1996年1月、初のパレスチナ自治政府の総選挙によって、アラファト議長が大統領に選ばれた。しかし96年にはイスラエルの選挙は、右翼リクード党が勝利し、ネタニヤフ首相のもとで武装対立がつづくことになった。99年になって、ふたたび労働党による「和平交渉」のきざしがみられたが、「オスロ合意」自身イスラエルの安全対策にすぎず、国境、首都、難民問題など、パレスチナ側に譲歩を強いるばかりであった。アラファトもこれ以上譲歩しえないままに2000年キャンプデービッドでの和平交渉は決裂した。またリクード党首となったシャロンによる「ハラム・アッシャリフ」侵入の強行から第二次インティファダがはじまった。イスラエルによる弾圧はパレスチナ人民をふたたびインティファダの道に転換させた。またクリントン政権はアラファト・バラクによる和平交渉の失敗のまま、2001年からの共和党ブッシュ息子政権に席を譲ることになる。

このようにざっとみると、90年代のパレスチナは、民主的な民族的合意なく、秘密裡に強権の手法によって「オスロ合意」がはじまり、困難に直面した。PLO指導部自らがパレスチナ世論を分断した。ハマス支持などの民衆の意志はPLOを不信任することからはじまった。また当初アラファトを支持したパレスチナ和平交渉代表団もアラファトら指導部の非民主的なあり方を批判しつづけた。イスラエル政府の「和平交渉」はインティファダを終息させようとするイスラエルの安全対策の一つにすぎず、パレスチナに分裂を残しておわってしまった。イスラエル政府には、パレスチナ人の占領地への「帰還の承認」や「首都エルサレムの合併」を撤回する考えはなかった。その分、PLOが和平交渉に加わるほど、米国・イスラエルからもパレスチナ人民からもPLOアラファト議長自身批判される構造に押し込まれた。

レバノンでは、「タイフ合意」を受けて、91年湾岸戦争後の5月、シリア-レバノン友好兄弟条約を締結した。レバノンに対するシリアの特別な関係と軍の駐留を合法化した。シリアはソ連東欧崩壊後、湾岸戦争にアラブ軍として軍隊を送りサダム・フセインに対決した。そしてシリアは新しい中東和平の基盤として、常々主張していた包括的和平の実現にむけて、レバノンと共同歩調で和平を進めるねらいがあった。

92年には内戦以来初のレバノン総選挙が行なわれた。ソ連東欧崩壊を経て、レバノン共産党も力を失った。かつて内戦時部族宗派を越えてLNM形成の主軸だった共産党は、部族宗派的な居住地域を持たないために、選挙によってますます影響力を失っていくことになった。ヒズボラも14議席を獲得した。

選挙後ハリリがレバノンの首相として国の復興を開始した。内戦で破壊された街や空港、インフラを再生しつつ進んだ。それはまた解放地域の民兵の解散と軍事施設封鎖撤去を意味した。レバノン人組織ヒズボラに対してイスラエルへの反占領闘争に正当な位置が与えられると同時に、パレスチナ人への管理統制は強化された。レバノンの経済復興、西側資本の導入は、東欧へ回る復興資金と競合の中で調達しながら進められた。レバノン再建のための

債券発行など、のちにレバノン自身を債務国化していく手法で進められた。

こうした中で、97年ハリリ首相の直属の部下による私たちへの逮捕急襲があり、ベイルートでレバノン人日本人が20人以上逮捕され、のちに5人が起訴されるという事態に直面することになった。このように新しい変化の中での90年代の闘いであった。

3 私たちの90年代の路線

「人民革命党」へと改組し在外はひきつついて国際活動と国内母体建設の二重の闘いがつづいた。

90年代の国際関係は国際連帯戦線（ISF）による相互支援やインティファダの被占領地支援共同など非公然の活動がつづいた。加えて90年代中期以降は自らの存在そのものを防衛する闘いが問われた。ここでは、日本にかかわる点を政治路線的にとらえておきたい。ことに89年の東欧崩壊の教訓をふまえて、日本の闘いを重点とした党形成をめざしており、日本の戦線・路線について検討していった。

1) 地域陣地戦

「人民革命勝利に向けて」という90年に書かれた文章がある（『日本赤軍20年の軌跡』に収録）。これは80年代からの総括地平を91年の人民革命党に継承したものである。この中では第一には、「人民革命の時代がはじまった」として、ソ連東欧を席卷している人民自らが主権を確立するための闘いを積極的にとらえた。「これまでの共産党、共産主義者のあり方の変革を問うものであり、革命の主体、社会の主権者としての人民を、援助する党、共産主義者が本来の姿に戻ることを要求している。人民革命の時代においては民主主義を徹底し、人民主権の確立を徹底していく中に真の共生社会を作りあげていく道がある」として、人民の共生と自治を求める闘いに呼応して、人民革命の反米・反独占を国際主義的責務とする日本の闘いを規定した。

「人民革命」をどのように日本の社会・市民が望んでいるかの現情分析、階級分析の欠けたままではあったが、人民権力樹立とそれ以降の社会主義路線をソ連東欧の党の教訓とした。そしてその中で日本において闘う5つの戦略的観点として、「第1に戦略における主導性の観点、第2に思想的結束の観点、第3に陣地戦の観点、第4にゲリラ戦の観点、第5に国際主義の観点で闘う」意義を説明した。そして、これからの闘い方として陣地戦の観点を強調した。

陣地戦の観点とは、

「第一に文字どおり味方の陣地を形成拡大して闘うことである。これは現在を運動戦や自己の組織の力量の拡大のうえに、革命的な時期の到来を待つという観点对立するものである。あらたな社会の母体を現在から敵の中に形成し拡大する闘いである。それは人民の前に新たな社会を示しつつ闘うことである。

第二に敵の管理支配の弱いところから開始し、敵の支配をくいやぶりながら、敵の中核を包囲するという観点である。これは敵の管理の中核の大都市などでの闘いを中心におき、敵の危機まで待つという観点对立している。

（中略）

第三にこの闘いは、地域を主戦場とし、生産点を従とする。これは生産点での産業別の組織化、職場細胞を形成することを戦略上の要とする観点对立する。また選挙闘争を前提に地域を中心におくという観点とも対立する。地域における生産・生活領域を含む全領域を組織していかなければならない。これは現在の敵の管理体系との全面的な対決を意味し、同時にこれは生活の生産と人民自身の組織化、そして地域権力の獲得を可能とする。

第四に陣地戦は統一戦線の質的な発展を保証する。統一戦線を単なる政治的な統一戦線と考える観点对立するものである。陣地戦は統一の物質的基盤を形成し、同質化過程を促進するものであり、人民権力の実体としての統一戦線をきたえていく。

第五に、陣地戦は持久的な権力奪取の闘いの展開を保証するものである。これはゼネストから蜂起へという観点对立する。蜂起は一瞬にしてうまれるものではなく、闘いを通じた敵味方の力関係の転換の中で勝利が保証される」（後略）ととらえている。

「国際主義と組織化された暴力」を日本にはじまる縦軸の歴史の旗として闘ってきた。また横軸としていえば、パレスチナのインティファダを経て、人民参加の民主主義によって組織されてきた住民委員会の闘いに学んできた。住民を主体に地域主権当事者主権を拡大していく闘いとしてあった。これらは短い間、82年のベイルートの

イスラエルの侵略時にも組織された。住民が地域の宗派的部族的リーダーと直接集会や対話を経て、居住単位に關う委員会をつくりあげていった。水、パンなどの生活必需品から反占領の闘いや救援を直接民主主義によって相互支援し合った。こうした地域の住民委員会はパレスチナでもインティファダの闘いの中で育ち、地域自治が中央のPLO政治闘争方針をも規定していく力を育てていった。それはイスラエルの占領支配に対して見えない二重権力を形成しつつ、協同の領域を拡大していくように闘うことを重視し闘っていた。これらの教訓からも決して同じではないが、日本の中でも各地にすでにある国内の地域自治の闘いに注目していくようになった。

しかし、当時をとらえ返してみると、「権力奪取」をアブリアリに求めている観念的主観的傾向があった。闘いの中で「統一」や「同質化」がつくられていくという考えも、レバノンの経験やパレスチナの戦場の闘いのエネルギーの実感として、安易に提起されている。むしろ、日本は当時は多様化していく80年代を経て、それらを多様性として認める関係の結び方こそ問われていたのではなかったか。社会総体ことに日本の現実を見渡すことにならず、狭い左翼世界の文献を通して、日本の戦略をたてる弱点があった。

2) 私たちのえがいた90年代

1991年の結党（といっても日本赤軍の「人民革命党」への改組のレベルに過ぎないが）をもって、2000年までの10カ年の見通しを立てた。これは「日本赤軍」自身の党的再編であったが、きびしい攻防下非公然に進めた。公然とは、これまで通り「日本赤軍」として活動する方法をとった。これからの10年を「主体準備期における闘い」と規定した。つまり国内に党的な力を確固としてつくりあげること目標とした。

今後10年の情勢の展望としては、「アメリカの一元的支配。アメリカ帝国主義は多国籍資本の自由を実現するために、ますます世界を均一の制度として管理支配しようとしている。それは、第一に核、軍事独占による統制、第二にそれらを合法化する国連の役割づくり、第三に社会主義勢力の解体と支配、抱き込み、第四に第三世界への介入従属の強化、第五に権力奪取の過渡にある革命勢力に対する「平和」解体策動と犯罪一般へのすりかえ（反テロ、反ドラッグなど）。これら五つの方向を世界の新秩序の名において、管理統制を強化する方向をとり、それに対立する勢力には、政治軍事、非合法手段において戦争対峙する構造をつくりだすことを目論んでいる」（1991年8月「決議文」より）と、アメリカの野望をとらえていた。しかし同時にアメリカの一元支配は矛盾に満ちているとして、

第一に資本主義諸国間の矛盾、

第二にゴルバチョフ路線以降の「ソ連をはじめとする旧社会主義、現社会主義諸国は、自国人民または民族問題の矛盾の激化に対応しえず、国連—アメリカの要求に屈せざるをえず、各国内はより分散化していく」ととらえた。

さらに第三に第三世界における人民の闘争の激化、グローバリズムの新植民地支配は、民族経済を破壊し、従属を強い、人民の生存の闘争は拡大する。闘うものたちの国際主義は民族主義に取って変えられる時代である。

また第四に帝国主義資本主義国内でも、国の進路、ポスト冷戦をめざして国論を二分するような矛盾が拡大するこれからの90年代ととらえた。

こうした中で、政治目標としては、日本においては、

①憲法改悪に反対し、日本の政治軍事大国化を阻止しよう。「日本の支配階級は、日本の政治軍事大国化に向けた国内再編の頂点として憲法の改悪を実現しようとしている。われわれはこの改憲阻止に全力をあげてとらえむ。改憲阻止の一点で合意できる全勢力を結集した統一戦線の形成を行ない、また地域的な単位で統一戦線と自治体の反改憲決議を積み重ねるなど、具体的阻止をめざす。

②民主主義の徹底をめざす。「人民不在の地方分権論に反対し、人民主権をめざす住民自治を実現しよう。この闘いにおいても、反改憲の闘いをつらぬく」

③日米安保に反対し、天皇制に反対し、アジア人民との共生をめざす。

④自民党の金権腐敗政治に反対し、人民不在の政治改革に反対し、人民主権の政治をつくりだそう。 と、以上のように国内の政治方針は、反改憲の闘いを90年代を貫く軸として闘う方向を取った。

3) 余儀なくされた再編とその不徹底

実際に「党」に改組し、91年日本の闘いにコミットしはじめた中で矛盾につき当たった。これは第一次の闘い（91～92年）を経た総括として、「建軍建党路線」の無理が露呈したことである。国内の党組織骨格の形成をこ

れまでの在外と同様な組織的あり方を軸に考えていたことが、運動の政治的広がりを損ない、組織全体の政治的統一を損なっていた。それは根本的な問題であり、徹底して検証されるべき問題としてあった。しかしそれは運動方針上の問題としてのみとらえ、主体形成論のあやまりへと深めることに至らなかった。

そこで問われていたのは、第一に、アラブにおける軍事組織的あり方を、90年代の日本における党形成に適用したことのあやまりの是正であった。第二に、在外が指導部機能を代行したあやまりである。党形成も社会運動もまた民主主義も、アラブと日本にはギャップと落差がある。一つの支部にすぎないと規定した在外が国内を支えようとする分、国内も在外に依存した。それは国内の主導的な闘いを損なった。第三に、在外の変化する攻防の質に規定されて国内の闘いの広がりをつくりえないような関係のあり方があった。

単一の党形成を目指し、条件と質の違う中で、よく分離と結合を見通した闘いをつくりきれなかった。

こうした点を直視せずに、第一次総括から第二次へと運動論的な転換によってのりきろうとし、党形成問題は据え置いた。政治的な闘いは広がりのさざしがあつたが、それらはむしろ、在外の結びつきではなく合法的な闘い、改憲阻止にふさわしい大衆的な闘いが問われていたのである。（この章つづく）

シゲに捧げる「私小説」その67

山田 美恵子

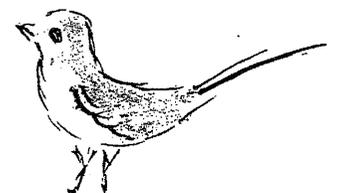
最近レンタルビデオで周防監督の映画「それでも僕はやってない」を観た。痴漢事件の冤罪をテーマにした映画だが、警察の留置場の雰囲気、検察の調べ室のようす、一端容疑者になったらどんな扱いを受けるか、普段の生活からはけっして推し測れない状況がよく描かれていて、重苦しい気持にはなつたが観る価値があつた。裁判に臨む前に被告に会う前に、既に判決を決めてかかっている裁判官の恐ろしさに身が縮んだ。いよいよ最高裁に臨む、重信房子さんの裁判が公正なものであるよう心から祈っている。さて小説の続きに入ります。

星美が育てられた乳児院は、二歳までに養子縁組して出すのが決まりのようだった。星美も二歳前に養い親が決まり、引き取られたらしい。しかし、半年で返されたという経歴があつた。健康に発達した乳児ならば、寝返り、はいはい、おすわり、そしてたっち、あんよと、かわいらしく成長し、パパママの胸にとびこんでくる時期だ。しかし出産時になにか脳に衝撃を受けた障害で、右足に軽い麻痺があり、右目が左目に比べて極端に弱視という星美はバランスが悪く、歩くことは容易ではなかったはずだ。覚悟のない初めての、しかも自分で生んでない親にとっては負担の重い乳児であつたのだろう。

私が養子縁組の希望を児童相談所に提出したとき、児童相談所は、里親希望の子供はすぐ決まるが、養子縁組は今4、5年待ちますよ、といった。昔のように、捨て子や親のいない子供は少なく、交通遺児やなんらかの事情で一時的に児童相談所や施設で

預かり養育しているが、やがては親が引き取りたいという子供がほとんどだという。私は少しがっかりして家にもどつたのだ。しかし夏休みが終わる頃、急に呼び出しがあつたのだ。ほとんどの養子縁組希望者が一番に書いている条件を、私は書かなかつたらしい。それは私がたまたま意識していなかつたことなのだ。それは五体満足という条件だった。身体に麻痺があり、弱視で斜視で、一端養子縁組先から戻された星美はその条件に適応してなかつたため、残されていたのだ。私は、その話を聞き、星美の写真を見て、即座に「大丈夫です」と養子にすることを決断した。その写真の星美は白いレース襟のワンピースを着て頭にリボンをつけハンドバッグを持ち泣きそうな下がり眉をしていた。身体を傾かせて心細げに一人で戸外に立っているスナップだった。三歳の女兒の愛らしさより、心配そうな頼りない雰囲気が出ていた。

その後実際の星美に初めて会ったとき、色白でふっくらとしていて写真から受けた印象よりかわいらしくて私はとても嬉しかった。 つづく



面会について

以下の要領にしたがって、より多くの方が無駄なく面会できますよう、ご協力ください。

- ・面会は1日につき1組（3人まで）しか許可されていません。
- ・面会者自身を証明するもの、運転免許証・健康保険証などを持参してください。

曜日——重信さんとの関係（調整担当者）

★月曜日——明治大学の友人・知人（小川健）

★火・水曜日——一般（山本万里子）

★木・金曜日——親族と一般（大谷みどり）

*山本万里子 TEL: 090-4367-5389 E-mail: mariko481@hotmail.com

*大谷みどり 携帯メール: midorinokeitai@docomo.ne.jp E-mail: the-5th-element@hotmail.co.jp

*トラブルを避けるため、重信さんには事前に日時と面会者名をお知らせします。1週間前には上記担当者と調整してください。無調整で直接行っても、重信さんはその人に会うと、予定者と会えなくなるので拒否せざるを得ません。また面会予定が不都合になった時はできるだけ早く調整者にご連絡ください。

*上記の曜日ではどうしても不都合な方は調整者に申し出てください。希望の曜日の担当者と調整します。

「オリーブの樹」76号のお詫びと訂正

16ページ右列下から18行目～15行目

「りませんが、裁判の傍聴、……状況から、重信さんにこ」を、

同ページ下から6行目

「ハーグ事件についてくわしくはあ★うした重い刑事責」の★のところに移動・挿入してください。

後記

今年の冬は寒い。2月18日、南側の庭の梅が一輪咲いた。例年の開花は2月10日前後だから今年はいぶ遅い。それから10日余りだがまだ二分咲きである。きのうはメジロが二つがい、白黒の羽根の小鳥、コゲラだろうか四羽来た。庭といっても共同住宅の共同庭で、2本の苗を南側と北側に勝手に植えてからもう30年近くなる。北側の梅はまだ蕾もふくらんでいない。共同の庭の収穫物なので、梅干しを造って階段の9戸に30粒ほどずつ毎年配る。開花と蜂や虫の活動が重なりそうだから今年の収穫はかえって期待できる。 Q

イスラエルのハーレッツ紙が2月26日に行った世論調査によると、イスラエル人の64%が、イスラエル政府は、和平とハマスに捕らえられているイスラエル兵、ジラード・シャリットの釈放のために、ガザのハマス政府と直接対話すべき、と考えているとのこと。イスラエル人は、シャリットが1年半以上もガザに捕らわれている事実だけでなく、スデロットやガザ近辺の町々にこの7年間降ってくるカサム・ロケットに閉口していることを示していると、結論付けています。また、議会内でのハマスとの対話支持は、与党リクード内では48%ですが、シャロンのカディマ党内で55%、労働党内で72%に急増しているとのことです。 Y

連絡先 〒105-0004 東京都港区新橋2-8-16 石田ビル4階

救援連絡センター気付 「重信房子さんを支える会」

郵便振替 00110-4-613941 オリーブの樹

銀行口座 三井住友銀行 赤羽支店 226-3687269 オリーブの樹

www.geocities.jp/setfreemarian/index.html

頒布価格 500円

「正誤」表

第 77 号

- ①4P右下から15行目 私たち外人→私たち外国人
- ②5P左下から 14 行目 捕虜交歓→捕虜交換
- ③6P左下から10行目 私の一文→私の書評の一文
- ④6P右下から13行目 小さな運動→小さな親切運動
- ⑤8P左上から14行目 イニシサチブの日本の上からの
→イニシアチブの日本。
- ⑥11P左上から24行目 68年のPFLP 創立 40 周年のこの年
→PFLPも昨年 2007 年末に創立 40 周年を経たこの年